

高温・干ばつ・用水不足対策

7月

水 稲

水稲栽培では、確実に高温を回避する方法はないが、地温の上昇をできるだけ防ぐような水管理とすることが大切である。

- 1 早期栽培（4月下旬～5月上旬植えコシヒカリ）
穂ばらみ期～出穂開花期にあたるので、重点的に配水する。
- 2 短期栽培（5月中旬～6月上中旬植えコシヒカリ）
幼穂形成期～穂ばらみ期にあたるので、田面の湿潤状態を保つようかん水する。
- 3 普通期栽培（6月中下旬植えヒノヒカリ、おいでまい等）
無効分けつ期に入れば中干しを行うが、中干しの程度は、亀裂が1cm以上になったり、白乾きしないよう注意し、走り水を行う。

大 豆

- 1 播種時期に土壤が乾燥している場合は、は種深度をやや深くし、軽く鎮圧する。
- 2 は種または移植後、土壤の乾燥が続く場合は、動力噴霧機等を用いてかん水する。
- 3 栄養生長期（本葉が展開）に入れば、干ばつの影響は比較的少ないが、萎凋が激しく、早朝でも萎れが戻らない場合は、畦間に灌水を行う。かん水量は走り水程度とし、滞水しないようにする。

茶

- 1 カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、クワシロカイガラムシ等の吸汁性害虫の多発が予想される。これらの害虫による新芽の生育阻害、落葉、枝枯れの発生が懸念されるため、防除を徹底し、健全葉の確保に努める。
- 2 三番茶芽の整枝や一番茶後の中切り更新後の再整枝については、芽伸びが十分でないことから樹勢の維持を図るためにも今後の天候に留意し、降雨が少ないようであれば中止して葉層確保に努める。
- 3 かん水施設が整備され、かん漑水の確保が可能な地域では4～5日間隔で1回当たり20mm以上を目安としてかん水を行う。また、茶園周囲や幼木では、土面蒸発を抑制するため敷草、敷藁の確保が可能であればできるだけ早く実施する。

野 菜

マルチや敷藁等を活用して、水分蒸発の防止に努め、草勢維持を図るため、追肥は液肥での施用を主体とする。また、高温乾燥により病害虫が多発するおそれがあるので、適期防除に努める。

- 1 かん水、土壤乾燥の防止
マルチなどにより土壤からの蒸発を防ぐ。
かん水チューブ等でのかん水が可能で水量が限られている場合は、回数を減らして一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。かん水チューブ等でのかん水が可能でない場合は、水中ポンプや動力散布機等を利用して、ホースでうねの肩やうね間にかん水を行う。
うね間かん水する場合は、うね間が湿る程度に水を流す。この場合、長時間、うね間に水がたまると根が傷む場合があるので、多量の水を長時間、うねにためない。また、水口からほ場全体に一度に水をうね間に流そうとすると、水分過剰の場所が発生し、根傷み等の原因となるので、土嚢を活用して、2～3のうね間にうねの高さの半分程度まで水をため、水がたまったら土嚢を除いて水を流す作業を繰り返し、うね間が均等に湿るよう工夫する。特に、土壤の乾燥が長期間続いている場合は、かん水による根傷みが発生しやすいので、初めてのかん水は、土壤表面が湿る程度の量にとどめ、徐々に適正な土壤水分になるようかん水量を増やす。

2 施肥、草勢維持等

土壌が乾燥している状態では、肥料が溶けにくいいため肥効が遅れる。露地栽培は雨の前に、施設栽培の場合は、かん水前に施肥を行い肥効を高める。雨が降らない場合の露地栽培や水の確保が難しい施設栽培では、液肥や葉面散布剤を活用して肥料不足にならないよう、草勢維持に努める。

果菜類については、草勢維持のために適正な着果量、葉数になるように管理を行う。

土壌の乾燥が続くとトマト、ミニトマト、ピーマン等では、「心止まり」、「尻腐れ果」の発生が心配されるので、カルシウムを含む葉面散布剤を花房、新葉、生長点に十分な量がかかるよう葉面散布する。

3 施設の管理

施設内が高温となりやすいので、遮光をおこなうと共に、サイドや谷をできるだけ広く開放し、可能であるならば妻面の全面開放により、風通しを良くして内部の気温低下に努める。暖かい空気は、施設上部へ上昇するので妻面の上部を開放すると暖かい空気がぬけやすい。

4 病虫害防除

乾燥後のかん水は、肥効が高まり生育の軟弱徒長により、病気の発生が心配される。また、気温の上昇と乾燥によりアブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、うどんこ病等の発生も予想されるので、防除に努める。

果 樹・オリーブ

1 干害防止対策

1) 土壌乾燥の防止

① 敷藁、敷草の実施

早期に根の多く分布している場所へ厚く敷き、水の蒸散を防ぐ。

② 草刈りの実施

雑草が繁茂している場合は、刈取りを行う。

除草剤の利用にあたっては、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。

2) かん水

水の確保量を勘案して計画的に継続して実施する。

① 水量が十分確保できる場合は、7日～10日間隔で20～30 t / 10 a を全面かん水する。（ただし、ミカン等は8月10日頃以降は乾燥状態を保つ。）

② 水量が不十分な場合は、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水する。

1樹あたりかん水量は150～200㎖とし、約1週間ごとにかん水する。

3) 樹勢の維持および樹体の保護

① 結果過多の場合は早急に摘果する。（柑橘、カキ、キウイフルーツ）

② 着葉数の少ない樹勢衰弱樹や移植樹は、枝幹の日焼けを防止するため、白塗剤を塗布する。

③ 収穫の終わったモモ、ブドウへの礼肥は降雨を待って施用する。

④ 薬害防止のため、高温時、日中の薬剤散布を避ける。

2 高温対策

1) ブドウ、ハウスミカン、ハウスイチジクでは高温による着色障害が起こるので次の点に注意する。

① ハウスでは天張りに、露地ブドウでは棚上に遮光資材（遮光率30%程度）を張り、温度を下げる。

② 夜温を下げるため、夕方、少量の水を葉面にまたは土壌面に散水し、気温を下げる。（この場合、水量が多くなり過ぎて、浮皮や裂果を起こさないよう注意する。）

2) 高温乾燥によりハダニ類、アザミウマ類、カメムシ類等の被害予想されるので、注意して防除を徹底する。

花 き

1 敷藁、マルチの励行

マルチや稲藁等を活用して、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。

2 病虫害防除

ハダニ類、アブラムシ類、スリップス類などの発生が多くなるので防除に努める。高温時の散布は薬害が生じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。

3 かん水

かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方行うのを原則とする。

限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。

4 遮光資材の利用

高温障害が予想される場合は、遮光資材を掛けて、気温の上昇を緩和する。特に定植から活着期にかけては、寒冷紗などで遮光し、活着促進を図る。

5 施肥

追肥は高温・干ばつが解消されるまで中止し、もしどうしても必要な場合は、置き肥でなく薄めの液肥を与える。

6 電照

キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くする。

7 土寄せ

根量を増加させるため、できるものは株元に土寄せし、新根の発生を促す。

畜産

1 家畜管理

家畜の飲用水は十分に確保するとともに、防暑対策を確実に実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。

1) 畜舎環境の改善

①ファン送風の実施、通風の改善

②直射日光の遮光、日陰樹の利用、屋根への消石灰塗布・断熱材設置等

③飼育密度の軽減等

2) 飲用水および飼料の管理

①十分な飲用水の確保（貯水タンク設置、飲水器からのこぼれ水防止等）

②畜舎やパーラー等関連施設等で利用する水の節減（除ふんを徹底して、消毒の効果に支障をきたさない程度に節水）

③飼料の早朝および夜間給与（比較的涼しい時間帯に実施）

④飼料保管管理の徹底による変敗防止等（配合飼料タンクに風車式換気蓋の設置等）

⑤ビタミンやミネラル等補助飼料の適正給与

⑥異常畜の早期発見・早期治療

2 飼料作物

トウモロコシ等の飼料作物は、生育状況と降雨の状況を考慮して、水量を確保できる場合はかん水を実施するが、不可能な場合は早めに刈り取り、サイレージや乾草に調製する。（サイレージ等の調製時にはカビの発生に注意）

今後の天候によっては、再生草の利用や流通乾草による粗飼料の確保を図る。